

介しました。そのうえで、長い時間をかけて整えられた、このような社会教育施設の体制の中で、市民はその恩恵を受け、育まれてきたのに、その施設整備が後退されかねない状況に直面し、これは大変だと動きだしたのだと説明しました。

次に一旦、余興として、荒井と青木洋子さん（多摩市に中央図書館をつくる会）のリードで、「わたしたちの社会教育へ」（笠木透作詞・作曲「私の子どもたちへ」の替え歌。歌詞は配布資料参照）をみんなで歌いました。

そのあと、続けて、会のメンバーで、東寺方複合館の存続を考える会の代表でもある、齊藤仁さんから、「公共施設見直し行動プログラム」当初案での地域図書館ほか、社会教育施設の削減計画に直面して、市内各地ではじまった、社会教育施設を守る運動の今日至るまでの歩みー市長・市行政、市議会議員、教育委員会への働きかけ、広く市民に問題を伝える取組（市民情報紙の発行）等々が紹介されました。齊藤さんはさらに、この間の市民意識調査では、地域図書館が特に市民から大事に思われていることが分かること、しかし、昨年の市のアンケート調査では、同じ質問項目が削られてしまっていて、市民の思いに誠実に向き合う努力に欠けているのではないかという疑問も投げかけました（齊藤報告は、配布資料内のパワーポイント画面印刷物を参照）。

第1部 グループに分かれてアンケートへの回答をまとめる。

「開催趣旨」に関わるこの二つの説明を受けたあと、次に、第1部では、参加受付時に割り振られたA、B、Cの三つのグループに分かれて討議を行いました。

各グループでは司会役を会のメンバーが担い、会が立候補予定者にむけて作成していた「アンケート」の質問項目に参加者がそれぞれ回答し、回答した内容を付箋紙に書いて、グループごとの模造紙に貼り、これをもとに討議を行っていく方法をとりました。

実際には、各グループで運営方法に違いがありましたが、どのグループも議論が白熱していました。

各グループでの討議の様子は、「対話集会」のあと、付箋紙が貼られた模造紙をもとに、**別紙 「〈第1部 各グループでの討議〉立候補予定者にむけた「多摩市政一特に社会教育施設に関するアンケート」に市民として回答」**にまとめましたので、そちらを参照してください（記録者 A グループ 厚芝麗子さん：聖ヶ丘図書館の存続を考える会 共同代表、Bグループ 大橋慶一さん：豊ヶ丘複合館存続の会代表、Cグループ 桜井清蔵さん：東寺方複合館の存続を考える会）。なおCグループについては、上記の事情から、司会を担われた桜井さんが補足の説明もつけています。

第2部 グループごとの発表

会場はあらかじめフロアに舞台をつくり、それを参加者が半円で囲む（グループごとのテーブルを配置）という設営にしてありました。そこで、各グループでの一通りの討議が終わったところで、第2部では、各グループが交代で舞台に立ち、それぞれの意見を書いた付

箋紙が貼られている模造紙を掲げながら、それぞれの討議の様子を紹介していきました。

Aグループ（司会 青木洋子さん：多摩市に中央図書館をつくる会代表）、Bグループ（司会 大橋慶一さん：豊ヶ丘複合館存続の会代表）は、メンバーがはじめに、それぞれアンケートへの回答を考え、付箋紙に書き込み、ひととおり回答をまとめたあとで、討議をはじめたとのことでした。はじめはみな、静かにそれぞれの回答に取り組んでいたこと、そのあとの議論では、お互い、考えたこともなかった意見にハッとさせられたことなども紹介されました。また、それぞれの意見が、付箋紙をもとに、丁寧に紹介されました。

Cグループ（司会 桜井清蔵さん：東寺方複合館の存続を考える会）は、アンケートのはじめの質問「どんなまちにしたいか」から話が発展して、そのまま議論が展開してしまい、アンケートの質問の一つひとつ答えたうえでの討議にはならなかったが、その中でも、社会教育施設についての意見交換はもちろん、さらに市議会議員のあり方まで議論が白熱したと紹介されました。

まとめ

この三つのグループからの報告のあと、フロアから意見を求め、二人の方から発言をいただきました。

一つは、現市長が平和教育を推奨していることを評価しているが、それだけでなく、今回、アンケートの質問でも取り上げている「多摩市市民自治基本条例」について、これも学校で学んでほしいというものでした。

もう一つは、多摩市で長く市議会議員をされた方からの発言で、同じグループのメンバーから促されて、多摩市の社会教育の歴史とまちづくりとをつなげる発言をされました。

「今の日本の政治状況をみていて、国民の主権者意識が弱いと痛感している。今の市長は正直で嘘はつかない人だと思う。そのうえで、政治家には国民や市民に向き合う倫理観が大事だと思う。だから、公民館とか図書館とかの政策に対してでも、やはり自分の考えを市民にも、議会にもきちんと伝え、それに対する批判をきちんと受けとめるという基本的な姿勢を持ち続けるべきだ。

自分はここに住んでもう 50 年近くになるが、今度選ばれる市長のときに、市制 50 周年という節目の年を迎える。多摩市ができたときの大本に、「人間開発都市」という素晴らしい、大きなビジョンがあった。後から移り住んだニュータウンの人たちと、既存の人たちが、もっと仲良く、お互い切磋琢磨して、多摩市というまちをつくりあげていこうということだった。この一番最初の願いが、50 年経って、今どこまでできたのか。

この 50 年間、基本になってきたのはやはり、社会教育施設をきちんと整備し、そこで市民がしっかりと、今では生涯学習ともいうが、当時は社会教育、その社会教育をどんどん広げ、社会教育をつうじて市民同士が学びあい、まちの主権者として、将来、次の世代へ、素晴らしい文化都市を手渡していこうとしてきた。そうしたとりくみが、今、どこまで達成できたか。中間地点で、今、問われている。

そういったときに、図書館を減らすとか、公民館を一館にするとか、考えられないことが言われて、いかななものかと思う。公民館も図書館も、私たちの、主権者の学校だ。このまちを次の世代にきちんとつなげていくための、教育機関なのだ。」

最後に荒井がまとめとして、以下のことを述べ閉会の言葉としました。

「フロアからのお二人の発言が、この対話集会のまとめのようで、ありがたい。

はじめにお詫びしたように、選挙などに疎く、分からないことがたくさんあった。これまでも分からないことはたくさんあったけれど、私たちは、それぞれはいろいろな活動しているので、お互いに学びあってきた。また、たとえば一昨年の財政問題など、これまで『出前講座』もたくさん活用し、公民館の市民企画講座もやって、職員の方々にいろいろ、それぞれが担当している仕事に関わる話をしてもらい、そこではじめて知ることがたくさんあった。また、こういう対話集会のような仕掛けをすることで、議員の方からも教えてもらい、またお互い意見を戦わせるということも学んできた。今回の突然の企画変更では、選挙管理委員会ともつながったので、これを機会に選挙についての『出前講座』もしようかと考えている。

こんなふうにならぬ形で、私たちは、学び合い、意見を戦わせ、また新しいことを知ってきた。忙しいので自分が関心のあることについてしか活動できないけれど、それでもいろいろな刺激を受けて、そんなこともあるか、面白いなと思う体験を重ねてきた。そういうふうに、このまちが、面白いなと思えることがいっぱいあるまちであってほしいと思っている。そのためにも、自分たちも、みんなでも自由にいろいろなことをやっていきたい。

その点では、メンバーの一人から、私たちはあれこれと叱咤激励され、そのおかげで、ずいぶんいろいろな活動を展開してきた。私自身も何もしてこなかったわけではなく、多摩市に移りすんだ30年前から少しは活動してきたけれど、この社会教育の会で活動の幅が大分広がってきた。それと関係するかどうかは不明だが、私たちを叱咤激励してきたそのメンバーに言わせると、今、多摩市では、だいたい自由に、市民がいろいろなことができるようになってきたという。そういえば、今の市長は話を聞いてくれるし、会ってくれる。職員も、丁寧に話してくれる。かつてと比べて変わってきたのかどうかはよくわからないけれど、しかし、最低でも、今のように、自由にもものが言える状況はずっと続いてほしい。そしてそういう雰囲気をもさらに発展させていきたいし、そのためにも、みんなでもいろいろ、楽しく活動していければと思っている。」

最後に、みんなでも記念の集合写真をとって、解散となりました。

※なお、受付は以下のメンバーで行いました。

安室君子（豊ヶ丘複合館存続の会）

辻山妙子（聖ヶ丘図書館の存続を考える会）

厚芝麗子（聖ヶ丘図書館の存続を考える会）